

偏愛・災厄

偏愛・災厄

作・中野浩作

登場人物

コガレ	カタチに焦がれるコガレ。
・	
・	
・	
ハリ	コガレの言葉を愛するハリ。
・	
・	
・	
カタチ	コガレが焦がれるカタチ。

憔悴しきった様子のコガレ。

そんなコガレの様子を尻目に、ハリ、素晴らしい笑顔である。

ハリ 「こんばんわあ。こんにちは！ あれ？ おはようございます？ うん。おは

こんばんちは！ これでいい？ これでいいのかな？ いいよね？ ダメなん
てことはないんですよ？ 昨日もありがとうございました！ 明日もよろしく
お願いします！ きつときつと明後日も明々後日も来週も来月も来年もお世話
になります！ ん？ お世話します？ うん……。え？ そんな、お世辞
なんていいですよ！ お世辞なんかよりも、お掃除させてください！ ……
嘘ですよ！ そんなことしませんけどね！ うふふふふふ……。ねえ、知
ってます？ 昨日の夜はすごい雨だったんです。知ってます？ そこに猫が通
りかかったんです。あの、角の、二丁目のコーヒー屋さんの。ほら、粉をしつ
かりと挽いてくれるところです。ご存じないんですか？ それはいけませんよ。
今度教えてあげますね。で、そんなことではなくてですね。猫の話です。犬も
いました。斑点の。ぶち模様の。可愛らしい猫と犬がね。え？ ですよ。犬
も猫もぶちがあったんです。斑点みたいなぶち模様。茶色と黒と黄土色。あん
まり綺麗じゃないですけど、可愛かったんです。でね、雨がすごかったんです。
雨。ざーざー降ってくるんです。傘なんて意味ないですよ。だって、横か
らも斜めからも降ってくるんですよ。アスファルトからも降ってくるみたいで、
それはもう大変でした。大変だったんです。でね、傘なんて意味がないんです
よ。本当に。だから、傘はとりあえずそこらに置いておいて、おうちに帰るこ
とにしたんです」

コガレ 「うん……」

ハリ 「大変だったんですよ！ それはもう、大変だったんです。ビュービュービュー、
ざーざーざー。びしょぬれっていうのは、少しでも乾いてる部分があるから、
濡れているっていう表現になると思うんですけど、あれはね、もう、まさしく
ずぶ濡れってやつでした！ あれ？ 濡れちゃってますね。全部濡れてる場合
はどういう言葉になるんでしょう？」

コガレ 「そうだね……」

ハリ 「そうですね！ そうですね！ いっそ、濡れるという言葉自体を一切使わない
方向でいきましょう！ そうしたらつまらないことでよくよする必要もなく
なりますもんね。ああ、なんて頭がいいんですか！ え？ 頭がいいのは私の
ほうですか？ そんなことないですよ！ そんなことないですよ！」

コガレ 「ああ……」

ハリ

「じゃあ、今度は猫のお話をしますね！ 黒ぶちの猫ってどう思います？ 黒いぶちのある猫じゃないですよ。黒い縁のある猫の話です。メガネみたいですね。メガネみたいな黒ぶちの猫が、どっかにいないかなあ・・・。いたらないなあ。金縁の猫だったら可愛いですよ。どうせなら黒よりも金のほうが絶対可愛らしいです。だって金ですよ、金！ キラキラ、ピカピカして、なんて綺麗なんだろうって、近付いてみたら、意外と噛み付かれちゃったりするかもしれません。うーん。困ったなあ。でも私は金縁猫さんと仲良しになりたいんです。わかってくれますか？ わかってくれますよね？ ねえ？」

コガレ 「・・・」

ハリ、黙る。

だが、ハリの声は聞こえる。

ハリ、コガレに向けた手紙を書き綴っている。書き綴った手紙を空間やコガレに貼り付けていく。その様子は明らかに常軌を逸しているが、ハリの表情はこの上もなく明るい。

コガレ 「頭がいっぱいの」

ハリ（音声のみ）「もう、どうしようもないぐらいブルーベリークレープが好きなんですよ！ ホイップクリームがいっぱい乗ってるじゃないですか。あれがたまらないですよ。え？ じゃあ、ブルーベリーじゃなくていいじゃないかって？ そういうことはいいじゃないですよ。イチゴでも、バナナでもダメなんです。これは、ブルーベリーとホイップクリームの濃厚な関係なんです。ブルーベリーの甘酸っぱさとホイップクリームの柔らかな甘みが、最高のハーモニーをかもし出します。わかります？ これは、イチゴやマンゴーには出来ない芸当なんです。あとあと、チョコレートは邪道だと思えます。苦いじゃないですか。ちよっぴりビターなのがあるじゃないですか？ アレが嫌なんです。甘いなら、一辺倒で甘いのにしろって思えます。え？ 普通のチョコレートのクリームは甘いんですか？ 知ってますよ、そんなこと。でもでも、あの駅前のクレープ屋さんの苦いんです。ほんのちよつとですけど苦いんです。それがとっても嫌なんです。わかります？ 嫌なんです。」

ハリ（音声のみ）「言っちゃったんです。体は柔らかいに越したことはないって。でも、実はお酔ってそんなに効果ないらしいですよ。とにかく、体は柔らかいに越したことはないんです。だって、転んだ時に大変でしょ？ 体が硬いと衝撃に耐えられないんですよ。だから、柔軟性は絶対に必要なんです。だから、毎日やってますよ。柔軟体操。柔軟体操は絶対に大事なんです。一日だって怠っちゃダメなんです。知ってます？ 一日サバるとその後

取り戻すのに三日はかかるんですよ？ 大変ですよね？ だから、サボらないようにするんです。人によっては無理なく簡単な、程度の軽いやつを繰り返しやるらしいんですけど、そんなこといつてたら、柔軟な柔らかい体は手に入らないですからね。それはもう、しっかりやるんです。それはもう、しっかりやるんです。だって、大怪我した後じゃ遅いんです。から、トレーニングは欠かさずやらないといけないんです。わかります？

大事なんですよ。柔軟性」

コガレ 「いつも、考えているの」

ハリ 「(紙を貼り付けながら) ホントに？」

コガレ 「ええ、本当」

ハリ 「そんなこと、しなくてもいいですよ」

コガレ 「考えてしまう」

ハリ 「そんなの、迷惑です」

コガレ 「無理」

ハリ 「困ります」

コガレ 「困ってる」

ハリ 「なんで？」

コガレ 「なんで？」

ハリ 「だって、そんなつもりなんてありませんから」

コガレ 「じゃあ、どういうつもりなの？」

ハリ 「こういうつもりです」

ハリ(音声のみ) 「人の迷惑にならないように、ペットボトルのラベルはちゃんと剥がしましょう。剥がしてちゃんと分別しないと、地球に優しくありませんから。

優しい地球を作るためには、優しくならないとダメなんです。だから、

ペットボトルと、空き缶と、シンナース——」

コガレ 「うるさい！」

ハリ 「大きな声は嫌いです」

コガレ 「うるさい」

ハリ 「静かな方がいいんです」

コガレ 「じゃあ、黙れ」

ハリ 「なんで？」

コガレ 「頭がいっぱいなの」

ハリ 「だから、迷惑ですよ」

コガレ 「じゃあ、黙れ。喋るな」

ハリ 「わかりました。じゃあ、読みますね」

コガレ 「待つて！ 止めて！ 音を出さないで！」

ハリ 「じゃあ、書きますね」

コガレ 「止めて！」

ハリ 「じゃあ、送りますね」

コガレ 「送らないで！ 便箋も焼き捨てて！」

ハリ 「嫌ですよ。もったいない」

コガレ 「使い切るまで？」

ハリ 「もちろん。あ、使い切っても、また買ってきます」

コガレ 「やめて。もういっぱいなの」

ハリ 「だから、勘弁してください？」

コガレ 「だから、勘弁してください！」

ハリ 「怒鳴らないで下さい」

コガレ 「・・・お願い、止めて。頭がいっぱいで、耳を塞いでも、目を閉じてても、口を紡いでも、あふれ出してくさうなぐらい、いっぱいなの」

ハリ 「気持ち悪いですよ」

コガレ 「毎日毎日」

ハリ 「ええ。毎日毎日」

コガレ 「その数は？」

ハリ 「数千通」

コガレ 「ベルは壊れて鳴らなくなった」

ハリ 「はい。だから、新しいものを送っておきました」

コガレ 「窓枠の隙間なく」

ハリ 「ガラスの面が見えなくなるほど」

コガレ 「ドアはとうに開かない」

ハリ 「糊付けは完璧ですから」

コガレ 「いつの頃から、やってくる」

ハリ 「手紙の数は数知れず」

コガレ 「便箋封筒破って捨てて」

ハリ 「気が付きや一日、日が暮れる」

コガレ 「気が付きや明日の手紙の時間」

ハリ 「ピンポーン」

コガレ 「という、恐怖のベルが」

ハリ 「今日もひとときわ鳴り響く」

コガレ、懐から、一通の手紙を取り出す。

コガレ 「拝啓、始まり」

ハリ 「敬具で終わる」

コガレ 「最後の括りは」

ハリ 「決まった一言決め文句」

コガレ&ハリ 「P・S」

コガレ 「あなたの言葉を愛します」

ハリ 「だから」

コガレ 「私の言葉を愛してください」

コガレひとりに。

しかし、ハリの言葉は無限に続いている。

コガレ 「ハリ。という名を付けた。自分では決して名乗らなかつたから、そう呼ぶことにした。貼り付ける。貼り付けてくる。そういう意味だ。好き勝手な言葉を。好きなだけ。好きなように。人の話なんて聞きやしない。違う。聞いている。耳には入っている。だけど――」

コガレ、ひとり喋り続けているハリを見る。

ハリ、コガレに見つめられ、ここぞとばかりに喋り始める。

ハリ 「空腹感に襲われたら、干し米を食べるといいんですよ！ 胃の中でむくむくむく、ってしてくれるから、知らない間にお腹が満腹になってるんです！」

コガレ 「そうなの」

ハリ 「(物凄く照れる) え？ そんな、そんなことないですよ！ そんなこといわないでください！ そんな、困っちゃいます。あなたにそんなこと言われたら、私、どうしたらいいのか・・・」

コガレ 「何が？」

ハリ 「(ハッとして、しかし、ドレツとして) 止めてください！ 止めてくださいよお。照れちゃうじゃないですかあ。照れるだけならいいけど、照れるだけならいいんですけどお、それだけじゃ収まらなくなったらどうするんですかあ」

コガレ 「どうなるの？」

ハリ 「(劇的に赤面) キャー！！ 熱い熱い！ もう、今日はすごく暑いですねえ。もうたままないぐらい熱いですね！ もう、たままない！」

コガレ 「(ハリをじつと見つめている)・・・」

ハリ 「暑い時に、熱い物を食べると、物凄く熱い！」

コガレ 「(ハリをじつと見つめている)」

ハリ 「でも、寒い時に冷たいものを食べると、どこか、暖かくなる気がするんですよ？ あれ、なんですかね？ なんですかね？」

コガレ 「(ハリをじつと見つめている)」

ハリ 「・・・」

コガレ 「・・・」

コガレとハリ、しばし見つめ合う。

ハリ 「(緊迫した声で) なんで、黙って見てるんですか？」

コガレ 「・・・」

ハリ 「(コガレを睨みつけて) なんで、黙って見てるんですか？」

コガレ 「・・・」

ハリ 「喋ってください」

コガレ 「・・・」

ハリ 「言葉を発してください」

コガレ 「・・・」

ハリ 「絶対に、好きだなんて言わないで下さい」

コガレ 「・・・」

ハリ 「・・・」

コガレ 「・・・」

ハリ 「見るな。喋れ」

コガレ 「・・・」

ハリ 「喋れ」

コガレ 「・・・」

ハリ 「喋れよ!!!!!!」

唐突に、BGM、電話のベル、ドアのノック音、窓を叩く音、加えてハリの長台詞。

圧倒されるコガレ。

ハリ、コガレを睨みつけながら、

ハリ 「写真たてを縦にしても、太平洋がひっくり返るなんてことは絶対にないんですよ。知っていますか？ 知らなかったんでしょう？ それくらいこの都市伝説は広まっていることに、辟易しているわけなんです。だから、そのような、写真たて地球滅亡説を全力と全精力を駆使して抹消しないといけないんです。わかりますか？ この苦労が？ この労力が。わかりますか？ 大変なんですよ。大変といえば、大きな変とはこれ如何について感じじゃないですか？ 感じは漢字を感じるためにあると思うんですけど、この漢字は簡単には感じる事が出来ない感じですよ。だって、大きな変って、どの辺なんですか？ 四角形の横の直線のことですか？ 角は九十度なんですか？ 角は九十度に熱されてるんですか？ 私は——」

コガレ 「ささやかな抵抗を、いつも試みる」

ハリ 「無駄ですよ」

コガレ 「押し寄せる無数に発せられる言葉によって潰される。名づけた名前のそのまま

に」

ハリ 「ハリ」

コガレ 「いくつもの言葉を」

ハリ 「貼り付けてくる。問答無用。聞く耳持たず」

コガレ 「黙って」

ハリ 「いーやーですよー！」

コガレ 「何故？」

ハリ 「何故？」

コガレ 「もう、たくさんなの」

ハリ 「もつと、たくさんですか？」

コガレ 「違う！」

ハリ 「ちようだい？」

コガレ 「何？」

ハリ 「もつと、欲しいんですか？」

コガレ 「違う！」

ハリ 「ちようだい？」

コガレ 「どういう耳してるの？」

ハリ 「こういう耳ですよ」

コガレ 「聞こえているんでしょう？」

ハリ 「はい」

コガレ 「意味もわかっているんでしょう？」

ハリ 「はい」

コガレ 「じゃあ、わかるでしょう？」

ハリ 「はい」

コガレ 「なら、止めて」

ハリ 「やめませうん」

コガレ 「だから、なんでなのよ!？」

ハリ 「好きだからです」

コガレ 「は？」

ハリ 「好きなんです」

コガレ 「・・・」

ハリ 「あ、勘違いしないでくださいね。あなたのことなんて、まったくもって好きじゃありませんから」

コガレ 「じゃあ、どうしたいの？」

ハリ 「しゃべってください」

コガレ 「なんで？」

ハリ

「喋ってください。いくつもいくつも。喋ってください。いくつもいくつも。曲解してあげますから。歪めてあげますから。だから、いくつもいくつも喋ってください。大好きなんです。あなたの言葉が。あなたの言葉だけが。だから、言葉だけで、十分なんです。あなたなんか要らないんです。あなたの言葉をください。あなたの言葉をいくつもいくつもください」

ハリから発せられる、無数の声。

奔流の中で、翻弄されるコガレ。

コガレ

「言葉が貼り付いてくる。何も出来ない。何も。無力。無抵抗に、受け入れるしかない。何も、出来ない。何も出来ない。曲解された言葉が戻ってくる。その言葉に限定される。人間が作られる。形が、歪んでいく。ハリの言葉が、頭にいつぱいで、何も、考えられない。何も、考えられなくなっていく。・・・違う。私は。違う。私が欲しい物がある。ハリの言葉なんかじゃない。私の求める、私の焦がれる。私の——」

突如、静寂。
座っているカタチ。

カタチ 「カタチ」

コガレ 「カタチ」

カタチ 「ええ」

コガレ 「あの」

カタチ 「・・・」

しばし、見つめ合う二人。
おもむろに、コガレ。

コガレ 「焦がれている」

カタチ 「そう」

コガレ 「ええ。焦がれているの」

カタチ 「焦がれているの？」

コガレ 「そう」

カタチ 「何に――」

コガレ 「カタチ」

カタチ 「そう」

コガレ 「そう」

カタチ 「かわいそう」

コガレ 「そうじゃない」

カタチ 「焦がされているのね」

コガレ 「違う」

カタチ 「だって、チラチラと」

コガレ 「違う。チリチリと」

カタチ 「焦がされているのに」

コガレ 「焦がれているの」

カタチ 「(妙にはっきりと) コガレ」

コガレ 「ええ」

カタチ 「カタチ、に」

コガレ 「ええ」

カタチ 「いいえ。焦がれているのよ」

コガレ 「いや。焦がれているの」

カタチ 「(妙にはつきりと)カタチ」

コガレ 「そう、カタチに焦がれている。ハリではなく――」

カタチ 「カ・タ・チ、に焦がれているのね」

コガレ 「そう、焦がれているんだ」

カタチ 「かわいそう」

コガレ 「そうじゃない。嬉しいんだ」

カタチ 「要らないわ」

コガレ 「焦がれている。だから」

カタチ 「来いと、言うのね」

コガレ 「そう。焦がれているから、来いと言う」

カタチ 「濃い・・・恋に溺れて、こちらに来いと故意的に」

コガレ 「心地よい古今の誇示に恋焦がれ、孤高の鯉の恋模様」

カタチ 「恋・・・鯉が溺れておぼつかず、その手を差し出し、乗り込めと

コガレ 「言う」

カタチ 「・・・要らないわ」

コガレ 「じゃあ、どうしたらいい？」

カタチ 「ちようだい」

コガレ 「何を？」

カタチ 「ちようだい」

コガレ 「何を？」

カタチ 「あなたの、形」

コガレ、カタチを見つめる。

そっぽを向いたままのカタチ。

ハリ登場

ハリ 「ねえねえ、立ち看板ってあるじゃないですか？ 寝看板はないですよ？ あ

れ、何ですかね？ あってもいいと思いませんか？ 寝看板。そうそう、ね

ている看板のことですよ。何のことだと思ったんですか？ え？ ちよつと、

そんなことあるわけないじゃないですか！？ 折れ看板なんてあるわけないで

すよ。馬鹿みたいですね。ほんと」

ハリが喋っている間。

カタチ、足元の紙を一枚手に取る。

カタチ 「ちようだい」

コガレ 「ああ」

ハリ 「馬鹿みたいです」

コガレ 「焦がれているから」

カタチ 「違う」

ハリ 「ばっかみたい」

カタチ 「形をちようだい」

コガレ 「そうしたら？」

ハリ 「そんなこと思うんですか？」

カタチ 「何もないわ」

コガレ 「そんなことない」

ハリ 「何のことだと思ったんですか？」

カタチ 「そんなこと」

コガレ 「ない」

ハリ 「ばっかやろー！！」

カタチ 「いいえ。それじゃない」

コガレ 「代価は？」

ハリ 「あると思うなよ！」

カタチ 「ありはしない」

コガレ 「じゃあ」

カタチ 「望むしかないわ」

ハリ 「あげるしかないの」

コガレ 「形を？」

カタチ 「カタチを」

ハリ 「しょーがないですよー」

コガレ 「焦がれているんだ」

カタチ 「そう、なら、ちようだい」

コガレ 「形？」

カタチ 「そう。カタチ」

ハリ 「馬鹿——」

カタチ、手にした紙を破り捨てる。

コガレ、驚き、口元を押さえ、カタチを見つめる。

カタチの破いた紙に『口』と、書かれている。

カタチ、奪った口を、自身の懷へ。

口がきけなくなったコガレ。

その横でハリ、のべつまくなしに喋り続けている。

ハリ 「でね、ふらつとして、突然バッターンって、倒れちゃったんですよ。もちろん、助けましたよ。人として当然ですからね。でもでも、その人、助けられてことなんてまったく気にしないで、触ってんじゃねえよ！ って。触ってんじゃねえよ！ ですよ。どういうことですか、と。だって、倒れてたら助けるでしょ、普通。え？ 何？ 逆ギレ？ あ、まさかの逆ギレですかっという。ホントにもう、信じられないですよね？」

その様子をただ見つめているだけのコガレ。

その視線に気が付くハリ。

ハリ 「何、見てるんですか？」

コガレ 「奪われた」

ハリ 「何、黙って見てるんですか？」

コガレ 「喋ることが出来ない」

ハリ 「何で、黙って見ているんですか？」

コガレ 「カタチに、形を奪われた」

カタチ 「口のカタチ」

コガレ 「奪われた。もう、何も口にできない」

ハリ 「どうして、黙って、こちらを見ているんでしょうか？」

コガレ 「食べることも、喋ることも出来ない。けれど、別に、構わない」

カタチ 「ちようだい」

コガレ 「あ、また欲しがっている。カタチが、形を欲しがっている」

カタチ 「コガレ」

コガレ 「ええ。形をあげる。いくらでも、あげる」

ハリ 「・・・喋れよ」

コガレ 「うるさい」

カタチ 「聞こえない」

ハリ 「・・・喋れ」

コガレ 「うるさい」

ハリ 「喋れよ！ こちらを見て何でもいいから喋ってよ！！」

コガレ 「懇願するハリは、ひどく小さく、ひ弱だった。もう、この口から言葉が発せら

れることはない。曲解されることはない」

ハリ、しゃがんで、泣き出してしまふ。

ハリ 「ちようだい。コガレの言葉をちようだい・・・」

コガレ、ハ리를眺める。

コガレ 「哀れだった」

カタチ&ハリ 「ちようだい」

カタチ、懷から手紙を取り出し、コガレに手渡す。

コガレ、それをハ리에手渡す。

ハリ、嬉々として手紙を受け取り、封を切る。

同時にあふれ出す、無数のハ리의言葉達。

たまらず、耳を塞ぐコガレ。

ときめいているハリ。

ハリ 「声が聞けないなんて、なんて不幸だって思ったの。だけど、違うのね。その不幸は、二人の距離をこんなにも縮めるものだったなんて気が付かなかったわ！コガレの文字はなんて、綺麗なの！このひらがなの曲線はどうしてこんなに美しく曲がっているの！？このカタカナの鋭角度合ったら、感動の一言だわ！ああ、コガレの文字に焦がれてしまふ。焦がされてしまふ！」

カタチ 「うるさい！」

コガレ 「ハ리는求めた」

カタチ 「文字を求めた」

コガレ 「当然だ」

ハリ 「当然よ」

コガレ 「声が出ぬなら」

カタチ 「文字を求める」

ハリ 「コガレの文字を曲解するわ」

コガレ 「都合よく歪められる」

カタチ 「都合よく理解される」

ハリ 「当然でしょ？ 私はコガレを愛すのだから」

コガレ 「愛す？ 違う。違うだろう？ 愛しているのは——」

カタチ 「言葉だ！！」

カタチ、『言葉』と書かれた紙を破り捨てる。
ハリの言葉が事切れ、その場に崩れ落ちるハリ。
コガレ、嬉しそうに、にやりと笑う。

コガレ 「これで、言葉も失った」

カタチ 「もはや、声も言葉もなく」

コガレ 「離れていくだろう」

カタチ 「離れていくのだ」

コガレ 「ハリ」

カタチ 「喋る口も」

コガレ 「語る言葉も失って」

カタチ 「ハリ」

コガレ 「好きに勝手に貼り付ける」

カタチ 「自身の言葉は枯れ果てて」

コガレ 「もう、何も」

カタチ 「もう、どれも」

コガレ 「貼り付ける行為は消滅する」

カタチ 「都合のいい言葉はどこにも無くなる」

コガレ 「これで」

カタチ 「コガレ」

カタチ、コガレに向き直る。

コガレ、カタチに手を差し伸べようとする。

しかし、

ハリ 「(ゆっくりと腕を伸ばす)」

舞い戻る、ハリの声。

なだれ込むハリの声の中、苦しむコガレ。

カタチ、その中を悠然と進み、コガレの耳を、破り捨てる。

突如、無音。

しかし、ハリは猛然と喋り続けている。

カタチ 「ちようだい」

コガレ 「聞こえない」

カタチ 「ちようだい」

コガレ 「なにも、聞こえない」

カタチ、コガレの目を手にする。

カタチ 「ちようだい」

コガレ 「ダメ」

カタチ 「ちようだいよ」

コガレ 「ダメ。それは、ダメ。カタチが、いなくなる」

カタチ 「なくなる」

コガレ 「無くなる？」

カタチ 「焦がれ焦がれて焦がされて。かわいそう」

コガレ 「違う。焦がれているの。カタチに」

カタチ 「そう。形に」

コガレ 「そう。カタチに」

カタチ 「それは、私じゃないわ」

コガレ 「違う。あなたに焦がれているの」

カタチ 「カタチという形を持つ」

コガレ 「あなたに」

カタチ 「焦がれているのは私に？ それとも、形かしら？」

コガレ 「何を言っているの？」

カタチ 「わからないの？」

コガレ 「わからない」

カタチ 「・・・そう。かわいそう」

コガレ 「焦がれているの。あなたに」

カタチ 「そう。かわいそう」

コガレ 「焦がれているのよ。あなたに」

カタチ 「そう。かわいそう」

コガレ 「私は、あなたに恋焦がれて——」

カタチ 「あなたが焦がれているのは」

カタチ、コガレの目を、破り捨てる。

カタチ 「形」

暗転。

暗転中

紙を破る音のみが聞こえる。

コガレ 「真っ暗だ」

カタチ 「真っ暗でしょう」

コガレ 「カタチ」

カタチ 「なあに」

コガレ 「声が聞こえない」

カタチ 「私には、聞こえるわ」

コガレ 「カタチの姿が見えない」

カタチ 「私には見えるわ」

紙を破る音。

コガレ 「また」

カタチ 「ええ。これはあなたの腕」

コガレ 「止めて」

カタチ 「ええ。止めないわ。だってあなたはくれると言った」

コガレ 「言っていない」

カタチ 「焦がれているのでしょうか？」

コガレ 「焦がれているよ」

カタチ 「なら、あなたは私にしてくれないと」

紙を破る音。

コガレ 「止めて！」

カタチ 「止めない。これは、あなたの胸」

コガレ 「何が残るの？」

カタチ 「貼り付けられたもの」

コガレ 「ハリ？」

カタチ 「そう。ハリが残るわ」

コガレ 「違う。ハリはコガレじゃない」

カタチ 「焦がれたコガレはハリに貼り付けられた」

コガレ 「違う。誰にも貼り付けられていない」

カタチ 「気が付かないのね」
コガレ 「私は、私」

紙を破る音。

コガレ 「止めて！」
カタチ 「これは、あなたの私」
コガレ 「私？」
カタチ 「そう。ありがとう」
コガレ 「何を？」
カタチ 「ありがとう。あなたの私を私にくれて」
コガレ 「嫌よ。誰にもあげない。私を誰かにあげるなんて。あなたに焦がれているの。あなたに焦がれている私をあげられるわけが無い」
カタチ 「そんなこと。どうでもいいわ」

紙を破く音。

コガレ 「もう、何も無い」
カタチ 「ええ」
コガレ 「残ったのは？」
カタチ 「・・・貼り付いた、あなた」
コガレ 「コガレ？」
カタチ 「いいえ」
コガレ 「・・・ハリはどこ？」
カタチ 「どこにも」
コガレ 「ハリはどこ？」
カタチ 「どこにもいないわ」
コガレ 「私は、どこ」
カタチ 「私が貰ってしまったわ」
コガレ 「私はどこ」
カタチ 「私が貰ってしまったわ」
コガレ 「私は——」
ハリ 「どこにもい——ませ——んよ——！！！！！！！！」

何らかの音楽。

『恋に焦がれて来い来いと
恋に焦がれて来い来いと
恋に焦がれて来い来いと
私の言葉はどこにもあらず。
私の形はどこにもあらず。
ついぞ消え行く恋模様。
どこに消えたか私の恋路
いずくに消えたか恋の果て
果てに消えたは私の形
私の形はどこにある
どこにもあらぬと知ってはおるが、
如何にしようと悩めども、
それを無駄だと言ってはくれるな。
所詮は私の恋の暮
恋を寄越せと口ずさみ、
恋を寄越せと奪われる。
貼った言葉の成れの果て、
果てにあるのは何も無く、
私の形は露と消え、
後に残るは貼り付いた、
恋愛偏愛曲解の、
私の愛とは思えもせぬわ。
恋に焦がれて来い来いと
恋に焦がれて来い来いと
恋に焦がれて来い来いと』

明転

三人「ちょうだい。私の、形」

終